A Study of Joseph Conrad's primitivism

Toshihiko UEKI

昭和49年9月30日受理

コンラッドは彼の作品の幾かにおいて，原始的，あるいは野蛮的と考えられている人間のもつ始源性の問題を人間の創造した文明世界や道徳・倫理観と対比しながら，これら人間のもつ野蛮性，原始性の方向に我々の意識を向けたことは彼の小説家としての価値に大いに寄与するところがあると思われる．では何故，隆勢をきわめていたヴィクトリア時代（The Victorian Age. 1837〜1901）に生き，コンラッドは，当時，社会全般に普遍していた合理主義，現実主義，理想主義等と一歩趣きを異にする小説を書いたのだろうか？　その原因となるものをこの小論で記述してみたい．その原因は大別して次の二つになると考えられる．一つは彼の個人的生活経験に基づくものであり，もう一つは19世紀後半の社会情勢であったと思われる．これら二つの原因について彼の作品を中心に見ていくことにしよう．

先づ第一の原因であると考えられる彼の個人的生活経験から学びとられた人間の原始性，野蛮性は，彼の母の叔父ニコラス（Nicholas）がナポレオン軍のロシア遠征に参加し，モスコー敗退の折に野犬の肉を食ったという話にその源をもっているように考えられる．この話のことを彼は『個人的記録』（*A Personal Record.* 1912）の中で次のように書いている．

> I knew, at a very early age, that my grand-uncle Nicholas B. was a Knight of the Legion of Honour and that he had also the Polish Cross for valour, *Virtuti Militari.* The knowledge of these glorious facts inspired in me an admiring veneration; yet it is not that sentiment, strong as it was, which resumes for me the force and the significance of his personality.
>
> It is overborne by another and complex impression of awe, compassion and horror. Mr. Nicholas B. remains for me the unfortunate and miserable (but heroic) being who once upon a time had eaten a dog. (1)

コンラッドが生涯深い敬意の念を抱いていた立派な教養と社会的地位をもっていた母の叔父ですら飢の前では空腹を満たすという原始人とちっとも変わるところのない本能的欲求の前に屈服し，野犬を殺して食ったのである．このような文明人の中に歴然として残っている原始人とちっとも変わらぬ人間の本質は小説 'Falk' の中に描かれている．

「フォーク」という小説は意図的に現代世界と古代世界が対比的に配置されていると同時に，現代世界と古代世界の同時的存在を暗示するものである．現代世界とは社会の不正，策謀等から完全に遮断されたダイアナ号（*Diana*）の船上で生活している，倫理的・道徳的で個別性を消去し，

人間の始源性に基づく問題など深く考慮することなく，日々の生活の安定のみを願い，社会に対する協調的人間としてしか存在していないヘルマン（Hermann）船長夫婦によって代表されているのであり，彼等は日常世界に継起するすべての事柄を倫理観・道徳観及び現代社会を形づくっている部分的な論理的整合性という元来抽象的な場においてのみ真の意味を持つ規準に照らし合わせて善悪の判断をするのであり，多様不可解な人間性の本質の意味を，現代世界の諸現象の意味を一元的にしてしまうのであり，彼等の規準に合わない行為は容赦なく彼等の意識の表面から野蛮的行為，特異な現象として抹殺されてしまうのである．すなわち彼等は無限の変化と矛盾に満ちた人間の心に基づいてこの現代世界が構成されていることを理解せず，現代世界の造り出した理論的・観念的整合性に基づいて人間の心が構成されるものであると誤解しているのである．

一方，古代世界はケンタウロス（Centaur）にたとえられる動物的自己本存の本能に支配されたフォーク，その均整のとれた美しい肉体から神話の水の精を思わせ，針仕事など余り似合いそうになさそうな，若い太古の地球を象徴しているような，人類の未来に明るい希望を抱かせるヘルマン船長の姪，激しい狩猟に従事した古代人を思わせるニコラス（Nicholas）によって象徴されているのである．コンラッドはこうした二つの世界と，その各々の世界に属すると考えられる人物を配置しておいて，ここに人肉を食うといった異常な出来事を投入した場合，その各々の世界に属する人間がその行為をどのように受止めるかに興味を示しているのである．

フォークと船大工との生死を賭けた闘いは怨つらみや，利得に基づくものではなく，動物的本能に基づく闘いであった．すなわち食料として相手を食うか？相手に食われるか？の闘いであり，それは丁度，ジャングルにおける猛獣同士の闘い，古代における人間と野獣の闘いと変わるところは何もないのである．常に一番優れたものだけが生残るのである．全くの食料欠乏状態で長い間南極洋を漂流している船乗りにはもはや生きていくためには何ものでも犠牲にする素地が出来上っているのであり，倫理観や道徳観の這入込む余地はなく，敢て人間の死体を食うことも，丁度人食い人種にとって人肉は他の獣肉と変わるところがないように，決して異常なことではなく，殺された船大工はフォーク及び他の生存者の目には絶対的状況にいて生命を繋いでいくための食料としてしか映っていないのである．極度の空腹という本能的欲求の前では人間の始源性が倫理・道徳観，観念等を圧倒することは太古から変わりはない．小説‘Falk’はこのような未開社会の中での人間の原体験は，歴史（時間）を超越して現代世界に生きる我々の中にも内的な体験として常に存在しているのであり，時として文明性を打破してその姿を現わす要因をもっていることを示しているのである．そしてこの人間の原体験の持続性は‘Falk’の初頭において暗示されているのである．

> The wooden dining-room stuck out over the mud of the shore like a lacustrine dwelling; the planks of the floor seemed rotten; a decrepit old waiter tottered pathetically to and fro before an antediluvian and worm-eaten sideboard; the chipped plates might have been disintered from some kitchen midden near an inhabited lake; and the chops recalled times more ancient still. They brought forcibly to one's mind the night of ages when the primeval man, evolving the first rudiments of cookery from his dim consciousness,

scorched lumps of flesh at a fire of sticks in the company of other good fellows; then, gorged and happy, sat him back among the gnawed bones to tell his artless tales of experience—the tales of hunger and hunt—and of women, perhaps! (2)

だが，フォークは，本質的には本能に支配されている人間であっても，文明に全く浴していない原始人ではなく，文明社会の中で生きていた人間であり，救助された後も文明社会の中で生きたのである．問題はこの文明社会の規準に照らして彼の行為を考えてみる時，それはまさしく異常な行為と判断されるということなのである．すなわち，フォークは「生きる」という本能によってのみ支配されている単純な人間でありながら，反面，文明社会の倫理観や道徳観を全く無視し，他人に全く理解してもらえない状態で生きることも出来ないのである．従って彼の立場からすれば，彼が人間の肉を食わなければならない事態に追込まれたことが，彼の立場が理解してもらえないことが彼の不幸であり，彼の苦悩であって，彼を苦しめているものは決して罪の意識等ではない．換言すれば，彼のこの苦悩は人間は，元来，動物と変わるところなく，その本能によって規制され支配される動物であると同時に，その歴史性を破棄し，動物と人間を区別している人間存在としての本性を放棄し，動物性の中に自己を埋没させることも，又，逆に理性や観念のみによっても生きるものではないことを示しているのである．

コンラッドは小説「フォーク」において人間の原始性は，決して歴史的時間の過去への遡行，ある過去の状態の現在における再生を意味するのではく，常に現代生活の根底に横たわり，潜在的，且つ永久に存在する人間の本質的根源への意識の垂直的潜行として理解されなければならない現象としてとらえている．

次に第二の原因であると考えられる社会情勢に目を移してみるならば，彼の生まれた19世紀中期はヴィクトリア時代であり，英国の黄金時代であった．英国の国力もさることながら，文化面においてもカーライルやコールリッジによってドイツ観念論が紹介され，ロックやヒュームによって合理主義が唱えられ，その他にも理想主義や現実主義などが大いに盛んに論じられた時代であった．又，産業革命による工業の発達は本格的な資本主義体制を形成しつつ，資本家の利潤の独占，労働者の過労を生み，結果的には次第に労働者の社会意識の覚醒をうながし，選挙法の改正，工場法の確立を労働者自身が勝取ったが，その過程において第一インターナショナルを結成したり，プロレタリアによる階級組織，プロレタリア政権掌握，ブルジョアジー支配の転覆が労働組合によって強調された．しかし反面，外交政策においては歴代の内閣が帝国主義，植民地主義を唱え，大いに海外に植民地を武力によって拡大し，一大帝国を着々と建設しつつ，植民地を原料供給地及び製品の消費地として富の蓄積を重ね，英国は「世界の工場」といわれる程世界経済の中心を占めたのであったが，19世紀の後半からドイツやフランスとの政治的・経済的対立が顕示しはじめ，アメリカの経済力の伸展に伴って次第に英国は世界の経済的支配権を失っていった．又，社会の発展と共に市民生活も次第に複雑化していったが機械文明や合理主義の発展は人々を伝統的な神への信仰から遠ざけ，化学万能主義が人々の精神を支配していった．その結果19世紀末及び20世紀初頭，古き神と従来の倫理・道徳観を失った人々は精神的空虚に安んずること

が出来ず，新たな神を求めたにもかかわらず，新しい神は得られなかった．ここに19世紀末及び20世紀初頭の精神的不安が生じてきたのである．コンラッドはこうした社会の変化，価値観の変化を敏感に感じとっていた．彼は理想主義や経済援助といった表看板の裏にある強者が弱者を食いものにする帝国主義や植民地主義も知っていたし，子供の頃に経験したポーランドの独立運動を通じて，革命家の主義主張は愛国的で熱狂的ではあっても，狭量であるが故に往々にして巨大な権力の前に成功する見込みのないものであり，且つ革命がもたらすものは革命家にとって相応しい新しい制度であり，新しい専制主義であり，革命の過程において善良な市民をその中に巻込み，彼等の犠牲の上に革命がなされるのである．しかし革命とても人間性そのものを今迄と全く違ったものに変える力はない．このような解釈において，彼は社会の急激な変化を望まなかった人間であったといえる．しかし彼の気持などにはおかまいなく，19世紀から20世紀への新しい時代への転換期は物質的利益の追求と帝国主義が全ヨーロッパを覆い，武力による勢力拡大が各地で繰返されていた．特に彼はロシアとドイツの勢力拡充に強い不安感を抱き，今後の戦争は単なる軍隊間の武力衝突ではなく戦争の名のもとに民衆をも巻込み，大量虐殺を生む戦いであり，血縁関係や友愛関係による諸国間の協定や同盟も所詮は都合のいい時だけのものであり，根底にあるものは深い疑念と憎悪であると感じている．そして危機に向かう文明世界の問題点を次のように指摘している．

> The trouble of the civilised world is the want of a common conservative principle abstract enough to give the impulse, practical enough to form the rallying point of international action tending towards the restraint of particular ambitions. (3)

彼は武力侵略によって領土を拡大し，民衆を隷属化し，被侵略国の習慣，生活様式を破戒し，主権を奪うとしても，近代化された野蛮主義も人間の本質を変えることは出来ず，侵略国が被侵略国に残すものは強い憎悪と反抗心だけであることを予言している．事実，これはポーランドだけに関する問題だけではなく，その後，植民地化されたアフリカ，中近東，極東そして東南アジアにおいて侵略国が経験しなければならない問題であり，鎮圧と反抗の繰返しの中に野蛮な血なまぐさい行為が横行したのである．

このような社会的，政治的な不安の影は『闇の奥』（*'Heart of Darkness'* 1902）や『密偵』（*The Secret Agent.* 1907）及び『西洋人の目の下に』（*Under Western Eyes.* 1911）に見られるのである．『闇の奥』は単なる彼の個人的体験に基づく作品であるというのみならず，ヨーロッパの先進国の未開発地域に対する独善的なエゴイズム，搾取，無理解，実状を無視した観念論を描いてみせ，ヨーロッパ社会の植民地主義，武力主義をアイロニイーを交えながら痛烈に批判した．同時にコンラッドは文明社会の理想主義や倫理・道徳観に対して何ら自主的な見解を持たず，盲目的にそれらを絶対的なものとして自らの内に受け入れている無数の文明社会の大衆を代表していると考えられるクルツ（Kurtz）をそうした描象的な観念，規律を持たぬ暗黒の世界に投入し，暗国の世界と対峙した時，自らの信念（inboron strength）を持たぬ文明人が広大無辺の原始世界を前にしてその闇の魅力に引かれ自らの文明性を消失し，自らの内に眠っていた人間性の

始源的要素である原始性を暴露する様を，又，こうした暗黒の世界に直面した文明人がその文明性を失わず暗黒の世界において文明人として生きるためには自らの信念を拠所として，すなわち，自らを世界の中心に存する絶対的神として，価値判断，行動の指針を示すべき絶対者として生きなければならないことをマーロウ（Marlow）の姿の中にみせてくれたのである．そしてコンラッドは暗黒の世界に直面した現代人が，歴史的時間を超越して，太古の中に宿る人間の始源性と，文明社会にいる人々は案外気付いていないが，確実に現代人の中にある始源性との共通性という現実を否応無しに認識しなければならない精神的不安をマーロウの中に描いているのである．このあたりの現代人の精神的不安を『闇の奥』から少々長いが引用すれば次のようになる．

> The earth seemed uneathly. We are accustomed to look upon the shackled form of a conquered monster, but there—there you could look at a thing monstrous and free. It was uneathly, and the men were—No, they were not inhuman. well, you know, that was the worst of it—this suspicion of their not being inhuman. It would come slowly to one. They howled and leaped, and spun, and made horrid faces; but what thrilled you was just the thought of their humanity —like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar. Ugly. Yes, It was ugly enough; but if you were man enough you would admit to yourself that there was in you just the faintest trace of a response to the terrible frankness of that noise, a dim suspicion of there being a meaning in it which you—you so romote from the night of first ages—could comprehend. And why not? The mind of man is capable of anything—because everything is in it, all the past as well as all the future. What was there after all? Joy, fear, sorrow, devotion, valour, rage—who can tell?—but truth—truth stripped of its cloak of time. Let the fool gape and shudder—the man knows, and can look without a wink. But he must at least be as much of a man as these on the shore. He must meet that truth with his own true stuff—with his own inborn strength. Principles won't do. Acquisitions, clothes, pretty rags—rags that would fly off at the first good shake. (4)

更にマーロウは土人の打つ太鼓の響きを聞き次のようにも述べている．

> And I remember I confounded the beat of the drum with the beating of my heart, and was pleased at its calm regularity. (5)

『密偵』はコンラッドの個人的体験に基づくものではなく1894年2月15日に実際に起こったグリニッヂ天文台爆破事件にヒントを得て書かれたものであり，純粋にその当時の社会情勢から創作された政治小説であると考えられる．この小説において人間の始源性というものを見出すことは，一見，困難と思われるが，『密偵』は，「フオーク」や「闇の奥」とは違った，より陰惨な，間接的な野蛮性，カニバリズムを示す作品である．ここに現われる登場人物は彼等の個人的理論，主義，職業そして生活環境のゆえに彼等自身を文明人であると信じて疑わないのであり，彼等自身の中にある秩序ある社会に対する独善的な破壊的要素，弱者を餌食にするカニバリスティックな性格にも気付いていないのである．馬鹿げた意味のない天文台の爆破，ナイフによる殺害，結婚

の動機，犯人の捜査等，全てが理性，倫理・道徳観を欠いた自己保存本能に基づく行為であることを考慮すれば，文明化され，組織化された社会に住む文明人の中にもやはり歴史的時間を超越して人間を支配する始源性が存在しているのであり，一見，秩序のあるように見える社会も，実は，幾かの観念の上に辛うじて成立っているのであって，時にはつまらない個人的な欲望や観念によって激しく揺り動かされるのであり，本来はカオス的な存在なのである．すなわち，文明化された西欧社会も，煎じ詰めれば，過去長い間，野蛮的，非合理的という名のもとに軽蔑し，無視し，近代に至って植民地拡充の政策のもとに利用し，搾取してきた未開社会のそれと同じ母体に由来しているのである．この文明社会と未開社会との密接な関連性はスティーヴィー（Stevie）の描く無数の交差し，重複した円によって象徴されているのである．

コンラッドは「フォーク」において，最も原始的といえる，食料として人間の肉を食うという異常な出来事を描いてみせたが，「フォーク」における原始性は他の二つの作品における原始性と比較した場合，非常に単純であり異常な出来事のわりには深みも野蛮さも感じられない．この小説は，フォークという人物を通して，現代人の中にある未開人との共通要素を，人間や世界を支配しているものは，人間世界における部分的な体系に過ぎない観念や理性ではなく，欲望，幻想そして白日夢といったものの方が遙かに強いことを指摘したに過ぎないと考えられる．

「闇の奥」は文明社会と未開社会，文明人と未開人との対比において，文明社会や文明人の持つ観念や倫理・道徳観が全能の神でもあるかの如く日常世界全体を覆っている矛盾を指摘し，原始の世界や未開人は固定的，観念的なものではなく，流動的で無定形であり，こうした捕らえることのできない原始の力こそ人間を歴史的契機に鎖された世界よりもずっと無限で不条理な，しかも豊潤な精神世界の中に放出することを示しているのである．

『密偵』においてコンラッドは現代社会と現代人の中に潜む原始性を描き，我々のこの現代社会は合理主義，科学万能主義といったいくつかの観念や枠組の中に収まるものではなく，現代社会を動かす原動力となっているものはもっと野蛮なそして卑劣な個人的欲望や虚栄心等であり，我々が信じて疑わないある形態や観念の上に成立っている社会も次の瞬間には未開社会とちっとも変わるところのない混沌とした状態である奈落の底に転落する可能性のあることを，人間は歴史的経験を超越して存在するものではないことを教えてくれた．

これまでコンラッドの作品に現われた人間の始源性を見てきたのであるが，彼の描く始源性は未開人の中に見られる原始性とちっとも変わるものではないが，これは原始的要素を持っていても決して「未開」，「野蛮」 といった言葉で簡単に片付けられるものではなく，「未開」でありながら同時にその状態で成熟した一つの人間存在の不可欠な要素となっているものなのである．人間はこの本性ともいえる基本的要素の上に理性というもう一つの要素を兼備えていることはいうまでもないが．コンラッドにおいては本能，あるいは未発達の感性と同一視されうるこの始源性が人間存在の中心となっているのであって，理性はこの本能，あるいは未発達の感性に近い始源性に本来従属する人間的要素と考えられているようである．この始源性と理性の主客転倒の関係が現代社会を覆っているところに社会秩序が維持され社会の発達の条件があると考えられてい

るが，実はこれは非常に危険な関係であって，形骸化された部分的体系に過ぎない観念や倫理・道徳観を盲信し，人間の始源性を軽視するこの関係こそ社会秩序の破壊をもたらすものといえる．従って我々は人を支配する人間存在の基本的要素である始源性を深く熟知し，その上に自らの信念を確立する必要があると彼は言っているようである．

BIBLIOGRAPHY

I. PRIMARY SOURCES

Conrad, J. *The Nigger of the "Narcissus" and Tyhoon & Other Stories.* London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1964.

———. *Youth. Heart of Darkness. The End of Tether.* London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1967.

———. *The Secret Agent.* London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1960.

II. SECONDARY SOURCES

BOOKS

Conrad, J. *Notes on Life and Letters.* London: J. M. Dent And Sons Ltd., 1968.

———. *The Mirror of the Sea. A Personal Record.* London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1968.

中川　敏訳，文学批評ゼミナール　—18—『原始主義』研究社，1973.

大野　真弓編，世界各国史『イギリス史』，山川出版社，1974.

山口　昌男編，現代人の思想15.『未開と文明』，平凡社，1969.

Notes

1) J. Conrad, *A Personal Record.* p. 32.
2) ———. *The. Nigger of the "Narcissus" and Tyhoon & Other Stories.* pp. 145—146.
3) ———. *Notes on Life and Letters.* p. 111.
4) ———. *Youth. Heart of Darkness. The End of Tether.* pp. 96—97.
5) *Ibid.*, p. 142.

A Study of Jcseph Conrad's primitivism

Toshihiko UEKI

The word of primitivism has not been given a strict definition so far. But the primitivism found in Conrad's works seems to be given the notion of fundamental elements of human existence, transcending the original meanings the word "primitive" includes in. Through analisis of several works of his, we want to clear the meanings of his primitivism.